



Vol.75

机の上の小さな変革



イメージの不均衡

こんにちは、菅俊一です。今回は、自分の「身体のサイズ」を把握することについて考えてみたいと思います。

まず、椅子を2つ用意して、その2つを「自分がギリギリまっすぐに通り抜けられる幅」に並べて置いてみてください。事前に定規などで通り抜けられる幅を測ったり、足幅などを調べたりせず、あくまでも自分がイメージする間隔で置いてみてください。そして椅子を置いたら、実際に椅子の間をそのまま歩いて通り抜けられるか試してみましょう。

いかがですか？ 頭のなかのイメージよりも、椅子同士の間隔を広めに取ってしまっているなど、だいぶギャップがあるのではないのでしょうか。

今度は、細長く切った紙をテープで留めるなどして輪っかをつくってみましょう。その際に、輪っかを自分の人差し指がピッタリ通るサイズ感でつくってみてください。その際も、指の幅を測ったり比べたりすることなく、イメージのなかだけで調整してみてください。輪っかが完成したら、実際に指を通してみましょう。

ここでも、指がまったく通らなかったり、意外とスカスカだったり、イメージと現実とのギャップが生じているのではないかと思います。

最後に、自分の小指の長さと同じ長さの直線を紙に書いてみましょう。当然、こちらも測ったり比べたりせずにイメージのまま引いてみてください。実際に、書いた

線に重ねるようにして指の長さを比べてみると、予想外の指の長さにびっくりする人もいるかもしれません。

「内」と「外」のギャップを自覚する

さて、今回は自分の「身体のサイズ」に抱くイメージについて、3種類の比較をさせていただきました。当然のことながら、自分の身体は生まれてからずっと共にある存在なわけですが、それにもかかわらず、そのサイズの把握は曖昧さを伴うものであるということが実感できたのではないかと思います。

これは、別の言い方をすれば、「内」にいる側からは、「外」の様子を正確に捉えることが難しいということでもあります。この「内」と「外」のイメージのギャップは、身体の話だけでなく、社会のあらゆる場面で発生しています。

たとえば、自分が所属する組織などについても、自分たちが抱えている内側からのイメージと、外側から見られているイメージには大きなギャップがあるはずで

このように、内側から観測する外側の認識の非正確さに対して常に意識的であることで、自らを客観視して律したり、「内」と「外」で生じるギャップを利用して、何か新しい事を興すためのヒントを得たりすることができるかもしれません。

PROFILE 菅 俊一 〈SYUNICHI SUGE〉

コグニティブ・デザイナー。表現研究者。映像作家。多摩美術大学美術学部統合デザイン学科准教授。1980年東京都生まれ。人間の知覚能力に基づく新しい表現を研究・開発し、さまざまなメディアを用いて社会に提案している。主な仕事・著書に、NHK Eテレ『2355/0655』、『観察の練習』『ヘンテコノミクス』『ルール？本』など。